

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: [shakaitsushin@nifty.com](mailto:shakaitsushin@nifty.com)

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299-5367

郵便振替 〇〇一〇〇―九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

## くもくご

### ■巻頭言■

社会主義が「コロナ」を超える

編集部：2

小ブルジョアインテリのたわごと

原野人：3

― 小山、上野論争に寄せて (2) ―

レーニンがエンゲルスと会っていたら

滝野 忠：4

― 生誕150年と200年にあたって ―

コロナと世界経済

伊勢 太郎：8

中東情勢とアメリカ

水野 仁：11

― アフガニスタンを中心に ―

読者からのおたより

……………12

# 旬刊 社会通信

NO.1317

二〇二〇年八月一日号

二〇二〇年八月一日発行  
(毎月一日・二五日二回発行)

## 社会主義が「コロナ」を超える

「コロナ」は感染症、接触・飛沫が感染の原因です。ですから、予防は難しくありません。伝染経路を断ち切ればいいのです。かんとん、かつ最高の予防策は移動の禁止、制限です。感染し、生命を危険にさらしたいと思う者は一人もおりません。なのに、こんな簡単なことが徹底できません。なぜでしょうか。

感染症は自然災害であり、貧乏人も金持ちも選ばない、だから階級性・階級対立の考え方には当てはまらないとの意見もあります。この意見は「普遍性」をもつでしょうか。否です。現実には、資本主義という経済の仕組み、体制が、「コロナ」の予防をめぐり、貧乏人と金持ちを分断・対立させ、予防の確実な実行を困難にしています。

働かなければ食っていけない、蓄えなく、その日暮らしてテレワークは難しく、組織をもたない貧乏人を「コロナ」が直撃し、感染と生活の不安、生命の危険にさらしています。資本家の貨殖本能は、十分な予防策をとることはけつして許しません。

時間が経つにつれコロナ恐慌が、リーマン恐慌よりもっと深刻なことも見えてきました。世界の金融人は①「コロナ」がリーマン恐慌を上回る速度で大規模な経済危機を引き起こしている、②通常の貿易刺激策や消費の刺激策は意味がない、③あらゆる政策手段を動員しろと政府を突き上げます。たとえば元財務省副財務官の伊藤隆敏氏は「政府はいかに人を死なせないか、企業が流動性不足で倒れないかに集中すべきです。納税記録を基に所得が低い層や若者、子育て世帯に手厚く現金を給付する、中小企業の資金ぐりもなくてはいけません」と。小泉政権で経済財政担当相を務めた竹中平蔵氏は『週刊エコノミスト』（6月2日付）のインタビューの問「政府は国民への一律10万円の現金給付を実施する」にこう答えています。

「これまでの現金給付は、消費刺激策効果がなかったと言われるが、間違いだ。これは景気刺激策ではなく、生活救済策だ。10万円の給付は嬉しいが、1回では将来への不安も残るだろう。例えば、月に5万円を国民全員に差し上げたらどうか、その代わりにマイナンバー取得を義務づけ、所得が一定以上の人には後で返してもらう。これはベーシックインカム（最低所得保障）といえる。実現すれば、生活保護や年金所得がなくなる。年金を今まで積み立てた人はどうなるかという問題が残るが、後で考えればいい」

竹中氏は、ベーシックインカムというのはやりの言葉を使い、「所得が一定以上の人には後で返してもらおう」「年金や生活保護がなくなる」とおっしゃる。彼にとつてはベーシックインカムは、経済危機の時のバラマキのことであり、危機が終われば、「取り返せばいいというだけのことにはすぎません」。

竹中氏や伊藤隆敏氏のような権力の茶坊主は資本主義の階級性を知っています。いまはかけ値なしの「危機の時代だから、社会不安を取り除くため、なんでもする、しなければならん」というのです。「コロナ」は社会主義を考える大きな契機を与えてくれたのです。

(編集部)

## 小ブルジョアインテリのたわごと

―小山、上野論争に寄せて(2)―

### 銀行の救済

上野義昭君は次のようにも主張する。

「いまひとつの例は、社会政策ではないが、現に体制側が実践してきた金融機関への公的資金注入である。経営危機に陥った銀行を救済する際、必要とする銀行だけを選択して資金援助をしたなら、『その銀行は危ない』と、かえって預金は引き出されてしまう、取り付け騒ぎさえも起こるであろう。そこで、金融システム対策として、救済不要なメガバンクを含めすべての都市銀行に公的資金を注入する。・・・こうして、救済を要する銀行の破綻を防いだ。いやしくも、政権をめざす政党は、そのような政策の実現回路にも精通しなければならぬ。」

こうして上野君は今日の国家が、経営危機に陥った中小の金融機関だけでなく、三菱UFJ、三井住友、みずほの独占的三大銀行等々にも公的資金を注入してきたことを高く評価する。自民党政権のこのような政策の実現回路に、いやしくも、いたく敬意を表する。小ブルジョアインテリ、ここにありである。

### 持続化給付金

新型コロナウイルスの影響で売り上げが減った事業者には、最大二百万円を補助する国家(経済産業省)の事業についてはどうか。上野君は当然に、巨兆を蓄積するトヨタや三菱や日立や物産等々も、選別することなく全ての事業者に給付すべきと主張するのである。必要とする企業だけを選択してはかえって「危ない」と見られるから。

余裕のある独占的大企業には支給せずに、倒産の危機にある中小零細事業者には、最大二百万円までなどといわず、必要ならもつと多額の持続化給付金を速やかに支給すべきなどというやぼったい主張は、いやしくも、上野君の嘲笑するところであろう。

### 生活保護費にたちかえって

新型コロナウイルスの影響で生活保護の申請が増加している。これに対して自治体が窓口で申請を拒む「水際作戦」が横行している。自治体は総務省から職員を削減しろといわれ、福祉事務所は窓口対応の職員がさらに減らされている。困窮者の助けになる制度利用を促すべき福祉事務所のはずなのに、困窮者を追い返すのが普通のこととなっている。最後のセーフティネットである生活保護が圧殺されている。

近年の生活保護受給率を見ると、日本1・7%、イギリス9・3%、ドイツ9・7%、フランス5・7%、スウェーデン4・5%であり、日本は格段に低い。

本来、生活保護は「もらう」ではなく「利用する」べきものだ。憲法で「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」(生存権)が保障されている日本で、当然に利用すべき権利である。独占資本支配下で困窮者が困窮者となったのは自己責任ではない。ところが独占資本の国家は、この予算を削減するために腐心する。

最大の問題は上野君のような自治体労働者が、独占資本の国家と闘い、職員を増やし、救済を拡充し、生活保護制度を改善する代わりに、国家に屈して生活保護制度を否定し、BIのとき空論に陥って独占資本を喜ばせていることにある。(原野人)

## レーニンがエンゲルスと会っていたら

― 生涯 150年と200年にあたって ―

レーニンは1870年に生まれ1924年に死んだ。エンゲルスは1820年に生まれ1895年に死んだ。今年はレーニン生誕150年、エンゲルス生誕200年である。レーニンは20歳代前半でマルクスの学説を、史的唯物論・弁証法を我がものとしている。『資本論』（全3巻）を完全に読みこなしている。天才である。

レーニンは晩年のエンゲルスに面会を申し込んだ。エンゲルスは食道ガンで療養中とあって面会はかなわなかった。レーニン初期論文『いわゆる市場問題について』（1893年）、『「人民の友」とはなにか、：：：』（1894年）で、マルクスの学説を応用しナロードニキとの論戦を開始したばかりのレーニンが、エンゲルスと会い語り合っておれば、ドイツ社会民主党の中にあつて孤立を深めつつあつたエンゲルスを激励し、ロシアの社会主義への展望とマルクスの後継者の出現に、エンゲルスは彼らの学説への自信をさらに深めたことであろう。エンゲルスの死は残念である。

レーニンはエンゲルスの死に「なんとという理性の燈火が消えたことだろう、なんとという心臓が鼓動をやめたことだろう！」との題詞をつけて『フリードリヒ・エンゲルス』を追悼する。この論稿は『レーニン全集第2巻』のはじめ、『エンゲルスの追憶』（国民文庫）にある。時は1895年、レーニン25歳の秋である。

### 追悼文

レーニンは「エンゲルスがプロレタリアートのために何をしたかを理解するために、マルクスの学説と活動とが現代の労働運動の発展に、とつてもつていいる意義をはっきりつかむことが必要である」と、次のように強調する。

「一八九五年新暦八月五日（七月二十四日）、フリードリヒ・エンゲルスがロンドンで死去した。彼の友カール・マルクス（一八八三年死）のなきのちは、エンゲルスは、全文明世界における現代プロレタリアートのもつともひいでた学者であり教師であつた。運命がカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスを出あわせたときから、ふたりの友の生涯の仕事は、彼らの共通の事業となつた。

それゆえ、フリードリヒ・エンゲルスがプロレタリアートのためになにをしたかを理解するためには、マルクスの学説と活動とが現代の労働運動の発展にとつてもつていいる意義を、はつきりつかむことが必要である。マルクスとエンゲルスは、労働者階級とその諸要求とが近代経済制度の必然的な所産であり、この制度はブルジョア階級をつくりだすと同時に、不可避的にプロレタリアートをつくりだし、組織するということをしめした最初の人であつた。

彼らは、人類を、こんにちそれを抑圧している災厄からすくい出すものは、個々の高貴な個人の善意の企てではなくて、組織されたプロレタリアートの階級闘争であることを、しめした。

マルクスとエンゲルスは、社会主義とは夢想家の思いつきではなくて、近代社会の生産力の発展の終局の目標であり、必然的な結果であることを、その科学的労作にお

いて明らかにした最初の人であった。こんにちまでの成文史の全体は、階級闘争の歴史であり、ある社会階級の他の社会階級にたいする支配と勝利の交替の歴史であった。そして、これは、階級闘争と階級支配との基礎であるもの一すなわち、私的所有と無秩序な社会的生産とが消えさるまでは、こんごもつづくであろう。プロレタリアートの利益は、これらの基礎を廃棄することを要求する。だから、組織された労働者の意識的な階級闘争は、これらのものにおいて向けられなければならないのである。そして、いつさいの階級闘争は政治闘争である。」(全集②3〜4頁)

さらに、「エンゲルスの名前と生涯を労働者のひとりひとりが知っていなければならぬ理由」をこう述べる。

「マルクスとエンゲルスのこれらの見解は、こんにちでは、自己の解放のためにたたかっている全プロレタリアートによってわがものとされている。しかし、一八四〇年代にふたりの友が当時の社会主義的文筆界と社会運動とに参加したときには、このような見解はまったく新奇なものであった。

その当時には、才能のあるものもないものも、誠実なものも不誠実なものも、多くの人々が政治的自由のための闘争、帝王や警察や坊主どもの専制にたいする闘争に熱中していたが、しかし彼らは、ブルジョアジーとプロレタリアートの利害の対立を見なかつた。この人々は、労働者が独自の社会勢力として行動するなどという考えさえも受けいれなかつた。他方には、多くの夢想家たち、ときには天才でさえある夢想家たちが、現代の社会制度の不正なことを政府や支配階級に納得させさえすれば、地上に平和と全般的福祉とをもたらすことは、たやすいことだ、と考えていた。彼らは闘争をぬきにした社会主義を夢想したのである。

最後に、当時の社会主義者や一般に労働者階級の味方であった人々は、ほとんどみなプロレタリアートを災いとしか見ず、工業の成長に伴ってこの災いもまた成長していくありさまを、恐怖の念をもつてながめていた。だから、彼らはみな、どうすれば工業とプロレタリアートとの発達を阻止できるか、『歴史の車輪』をとどめられるか、と考えめぐらしたのであった。マルクスとエンゲルスは、プロレタリアートの発達にたいするこの一般の恐怖とは反対に、プロレタリアートの不断の成長にいつさいの望みをかけた。プロレタリアの数が多くなればなるほど、革命的階級としての彼らの力もますます大きくなり、社会主義はますます近づき、ますます可能なものとなる。マルクスとエンゲルスが労働者階級にたいしてなした貢献は、数言でつくせば、つぎのように言いあらわすことができる。

彼らは、労働者階級に自分を認識し自覚することをおしえ、夢想を科学でおきかえた、と。」(全集②4頁)

### 史的唯物論

レーニンは唯物史観という導きの糸を自由自在にあやつり10月革命を勝利に導き、20世紀を社会主義の時代とした。その理解は追悼文に成熟している。

「……の極少数者の致富が、ブルジョアジーの人民にたいする支配が、永遠につづ

くことがあるか？　ヘーゲルの哲学は精神や理念の発展を論じていた。それは観念論的であった。それは、精神の発展から、自然、人間および人的・社会的関係の発展を結論していた。

マルクスとエンゲルスは、永遠の発展過程というヘーゲルの思想を保存しながらも、観念論的な先入観を放棄した。彼らは、生活に目をむけることによって、精神の発展が自然の発展を説明するのではなく、その反対に、精神を自然から、物質から説明しなければならぬことを知った：ヘーゲルやその他のヘーゲル主義者とは反対に、マルクスとエンゲルスは唯物論者であった。世界と人間を唯物論的に観察した結果、彼らは、いっさいの自然現象の基礎には物質的な原因があるのと同じに、人間社会の発展も、物質的な生産力によって条件づけられていることを知った。人間の欲求を充足するのに必要な物資の生産にあたって人間がたがいにもむすぶ関係は、生産力の発展によつてきまる。そして、これらの関係によつて、社会生活のいっさいの現象、人間の志向、観念、法律が説明されるのである。生産力の発展は、私的所有に立脚する社会関係をつくりだす。しかし、こんにちでは生産力のこの同じ発展が大多数者から財産をうばい、それを極少数者の手中に集中していることを見るのである。

この発展は現代社会制度の基礎となつている「私的」所有を廃棄する。この発展そのものが、社会主義者が自分の目標としておられるのと同じ目標にむかつてすすんでいるのである。社会主義者がしなければならぬことは、どういふ社会勢力が現代社会にそれが占める地位からして社会主義の実現に利益をもっているかを理解し、この勢力に、それ自身の利益と歴史的任務とについての意識を付与すること、このことだけである。」（全集②5〜6頁）

ここではレーニンが20歳代前半にしてマルクスとエンゲルスの学説の要をとらえていたことだけを指摘すれば十分である。

### 搾取者の反逆

今、時代は暗転し、マルクスとエンゲルスの学説の無視、そして歪曲、否定、見直しがつづく。20世紀後半の1980〜90年代、なぜ70年以上の社会主義世界体制の発展、前進が暗転したか。レーニンはマルクス主義を歪め、労働者を資本家に売り渡す、えせ「社会主義者」と論争した。レーニンは第一次大戦以降、カウツキーを徹底的に批判した。彼は論争に勝った。なぜか、ロシアの大地に社会主義国家を生んだからだ。その論文『プロレタリア革命と背教者カウツキー』にこんな一節がある。

「資本主義から共産主義への移行は、歴史的な一時代である。この時代がおわらないあいだは、搾取者には必然的に再興の望みのこされていて、この望みは再興の企てに転化する。そして、最初の重大な敗北ののちには、自分が打ちたたおされることを予期せず、そうしたことを信ぜず、またそれについて考えようとさえしなかった、打ちたたおされた搾取者どもは、十倍の精力と狂暴な熱情と百倍にも増した憎しみをもって、奪いとられた「楽園」をとりもどすためにいままで非常に楽しい生活をしてきたのに、いまや「平民の無頼漢」から零落と貧困（あるいは「卑しい」労働…）の運命を負わされたその家族のために、戦闘に身を投じる。」

そして、この資本家である搾取者どものうしろには、小ブルジョアジーの広範な大衆がついていく。すべての国の数十年にわたる歴史的経験がこの小ブルジョアジーについて証明しているように、彼らは、動揺し、ためらい、きょうはプロレタリアートにしたがうが、あすは変革の困難に恐れをなし、労働者が敗北するか、なかば敗北するやいなや、あわてふためき、神経過敏となり、いらいらし、悲鳴をあげ、転々としてひとつの陣営から他の陣営へうつる：わがメンシエヴィキとエス・エルのように。しかも、事態がこうであるのに、数百年、数千年の特権の存否の問題が歴史によって日程にのぼされる死にもぐるいの、激しい戦争の時代に、多数者と少数者、純粋民主主義、独裁の不必要、搾取者と被搾取者との平等を説く!! こういうことをやるには、なんと底なしの低能、はかりしれない俗物根性が必要なことだろう!

だが、一八七一年から一九一四年にいたる比較的「平和な」資本主義の数十年は、日和見主義に順応している社会主義諸党のうちに、俗物根性と狭量と背教とのアウグウスの厩(うまや)を蓄積したのである。：：：(全集28 269〜270頁)

### 友情

マルクスとエンゲルスの友情がどれほど厚く、かつ絶妙のコンビネーションであったかについては、日本のマルクス・エンゲルスである向坂逸郎は『マルクス伝』(新潮社版マルクス・エンゲルス選集⑬340〜341頁)で、次のように語っている。

「エンゲルスは、マルクスに比較すると全体としてずっと軽快であり、多方面であり、享樂的であつたらしい。マルクスよりずっと感じやすいかわりに、そのなおり方も早かつたといわれている。頭脳のはたらきも早いかわりに、ぐっと掘り下げる点において、マルクスにおよばなかつた。

『新ライン新聞』時代、マルクスは一つの論文を書くにも苦心惨たん一晚中苦しんでいることがあるといわれるが、エンゲルスは、各地方からの報告をいち早くキャッチして、すぐ論文をまとめたといわれている。短い期間の見透しについては、エンゲルスの方が早く、かつ的確な判断を下したが、比較的永い見透しはマルクスの深刻な考察をまいったとある。この意味でも二人はきわめてよい調和を保った一つの二重唱をなしていたといつてよい。

学問上の労作において、政治上のできごとの判断の上に、運動上の指導において、この二人の性格の相違が絶好のコンビネーションを示していた。たとえば、『資本論』の著述についても、抽象理論と実際との結びつきに関して、いかにエンゲルスの力に負っているかは、彼らの往復書簡集からだけでもわかる。」

### 唯物史観と「社会学」

最後に、唯物史観とアメリカ流社会学、ヨーロッパ流社会学—中心はマクス・ウエーバー—と根本的にどこがどう異なるかについて、レーニンの文章にみる。われわれ凡人にとつて難しいのは唯物史観は「研究の手引き」の中味である。これをもつともよく示してくれているのがレーニンだ。『国家について』のなかでも、それを学びとれる。レーニンはマルクスとエンゲルスの学説をわがものとし、史的唯物論を口

シアの資本主義国家に適応し、世界ではじめて社会主義革命をなしたとげた。

【唯物史観の発見、あるいはもつと正確に言えば、社会現象の分野への唯物論の首尾一貫した延長、適用によつて、それ以前の歴史学説のもつていた二つのおもな欠陥が取りのぞかれた。第一には、それ以前の歴史学説は、せいぜい人々の歴史的活動の思想上の動機を考察したにとどまり、こうした動機がなにによつて呼びおこされたかを研究せず、社会諸関係の体系の発展における客観的合法性を把握せず、これらの関係の根源が物質的生産の発展の程度のうちにあることを見てとらなかつた。第二には、それ以前の学説は、ほかならぬ住民大衆の活動を考えに入れていなかったが、これにたいして史的唯物論は、大衆の社会的生活諸条件とこれらの条件の変化とを自然史〔博物学〕的な正確さで研究することをはじめて可能にしたものである。

マルクス以前の「社会学」と編史とは、せいぜい断片的にかきあつめてきた生(なま)のままの事実の集積や歴史的過程の個々の側面の描写をあたえただけであつた。マルクス主義は、いっさいのあい矛盾する諸傾向の総体を考察し、それらをさまざまに社会諸階級の、正確に規定できる生活諸条件と生産諸条件とに帰着させ、個々の「主導的」な思想をえらびだしたり解釈したりする点での主観主義と気ままを排除し、例外なしにあらゆる思想、あらゆるさまざま傾向の根源が物質的生産力の状態にあることをあきらかにして、経済的社会構成体の発生、発展、衰退の過程を包括的、全面的に研究する道をさししめした。

人間は自分で自分の歴史をつくる。しかし、その人間の、しかも多数の人間の動機はなにによつて決定されるのか、あい矛盾する思想や志向の衝突はなにによつて呼びおこされるのか、あまたの人間諸社会のこれらすべての衝突の総体はどういうものか、人間の歴史的活動全体の土台をつくりだす物質的生活の生産の客観的諸条件はどういうものか、これらの条件の發展法則はどういうものか、：：マルクスはこれらすべての問題に注意をむけ、歴史を、はなはだしく多面的で矛盾にみちたなかにも合法的な、単一の過程として、科学的に研究する道をさししめしたのである。】(レーニン全集、第21巻44〜45頁)

## コロナと世界経済

### ショック それとも恐慌

「コロナ」爆発から半年以上になる。メディアは社会・経済状況を「コロナショック」、「コロナ禍」と伝える。2008年の「百年に一度の恐慌」と国際金融資本の親分どもがもらしたリーマンについても、「リーマン・ショック」と。「ショック」は社会総体の運動、発展、反発を表現しない。一方から他方への単純な大きな一撃があつたというのみである。これでは全情勢を正しく掴めない。

リーマンはアメリカ最大の投資銀行であつた。不動産投機、不動産ローンを債券化し、儲けをたくらんだ。その矛盾が金融・不動産恐慌となつてハネ返り現れたのが、



リーマンだ。リーマンはショックという単純なものではなく、資本主義社会の社会・経済・政治がすべて絡み合っただけ起きた現象、つまり全般的恐慌であった。

「コロナ」もそう、恐慌だ。恐慌は「社会・経済総体の運動の結果である。コロナは自然現象なのでは」と考える人もいる。表面的にはそうだ。「コロナ」は感染症、伝染病だ。飛沫・接触で伝染する。伝染を防ぎ、予防するには移動の制限、禁止が求められる。爆発時には封鎖、休業である。移動の制限、禁止は流通を遮断する。社会は生産―交換―分配―消費と循環する。流通の中断、途絶は交換として生産を麻痺させる。物質的な再生産が壊される、くるのは恐慌である。

これは、労働者の資本家への重要な闘争形態であるストライキを考えればわかる。ストライキは生産阻害を目的におこなうものではない。労働者の生活を守るためだ。ストライキは労働生産過程が社会の中心的動力、基礎であることも示す。ストライキは労働者の力を示す。こうして、ストライキは資本家に圧力を加え譲歩をせまる。感染症の移動制限と禁止は、自然による「ストライキ」である。こんな観点から考えれば世の中楽しくなる。

### 恐慌―本質

恐慌は①投機、②財政破綻、③穀物不作等さまざまな原因で起こる。資本主義以前、商業（商人）資本が中心だった重商主義時代、チューリップ恐慌があった。草花のチューリップの球根が投機の対象とされ、世界経済を混乱させた事件である。

資本主義社会、産業資本が生産過程を全面的にとらえると様相は一変する。恐慌は突発的ではなく、生産力と生産関係の矛盾とその衝突として周期的におこる。マルクス、エンゲルスは『共産党宣言』（1848年）で、恐慌の社会的・経済的・政治的・歴史の意味を分析する。

【数十年来の工業および商業の歴史は、まさしく、近代的生産諸関係に対する、ブルジョア階級とその支配の生存条件である所有諸関係に対する、近代的生産諸力の逆の歴史にほかならない。ここには、かの商業恐慌をあげれば充分である。

それは、周期的にくりかえしながら、ますます急迫的に全ブルジョア社会の存立をおびやかす。この商業恐慌では、作り出された生産物の大部分ばかりでなく、これまでに作られた生産諸力の大部分さえ、破壊されるのが通例である。恐慌においては、以前のどんな時代にもとても起るとは考えられなかったような社会的疫病―過剰生産という疫病が発生する。社会が突然、一瞬のあいだ未開状態に逆もどりしたようになる。飢饉（ききん）、一般的な破壊戦争が、社会からすべての生活手段を奪い去ったように見える。工業も商業も破壊されたように見える。

なぜそうなるのか？ 社会に文明がありすぎ、生活手段が多すぎ、工業や商業が発達しすぎたからである。社会が自由にするのできる生産諸力は、もはやブルジョアの文明およびブルジョアの所有関係の促進には役立たないのだ。反対に、生産諸力はこの関係にとって強大になりすぎ、生産諸力がこの関係によって歯止めをかけられるのだ。そして生産諸力が、この歯止めを突破すると、たちまち全ブルジョア社会は

混乱におちいり、ブルジョアの所有の存在がおびやかされる。ブルジョアの諸関係は、それによって作られる富を容れるには、きゅうくつになったのである。】(岩波文庫改版『共産党宣言』50～51頁)。これが恐慌の本質である。

### 恐慌―形態

恐慌は資本主義の発展、構造、形態の変化とともに変化した。マルクスとエンゲルスが先の『宣言』を書いた時代、19世紀の資本主義、歴史的に発展的な産業資本の勃興期、恐慌は1825、1836、1847、1857、1866年とほぼ10年の周期で襲いかかった。イギリスが世界の工場として世界市場を一人占めしていた、自由貿易主義、自由競争の時代である。

競争は強い者が弱い者をからめとる。集中・合併による集積だ。資本は大きくなり独占へと変化・発展する。独占は自由と進歩を抑圧する。政治的には反動化、腐敗の構造をつくる。産業構造は綿・毛織物から造船、鉄道、石炭化学工業へ変化した。イギリスへの対抗勢力ドイツ、アメリカがイギリスを追い上げる。イギリス一国の生産力ですら世界市場は過剰であったのに、アメリカやドイツの生産力がイギリスを追い抜くようになった。

世界市場は生産力が大きくなるようには拡大しない。過剰生産が一般的かつ恒常的になった。19世紀末から20世紀のはじめ―第一次世界大戦まで―は、こうして慢性的過剰生産によるダラダラした不況(恐慌)の時代となった。

この時期に資本の形態も変化した。資本規模は巨大になり、個人的資本から株式資本へとように。証券取引所が「神」となり、信用制度が投機条件を大きくするというように。

第一次世界大戦はアメリカを世界の工場とした。兵器生産は消費財―電気製品、自動車等―の大量生産・大量消費の基礎をつくり、アメリカは「永遠の繁栄」を謳歌した。資本主義は永遠に続くと思われた。異変、乱調、大騒動は突然やって来た。「暗黒の月曜日」、1929年10月24日、株価暴落、株式恐慌である。この恐慌は第二次世界大戦―ドイツのポーランド侵攻、1938年―までつづいた。

世界大恐慌である。その様をアメリカにみる。卸売物価、製造業生産は50%も下がり、失業者は1929年100万人だったのが1933年には1200万人(失業率25%)になった。こうして大恐慌は第二次世界大戦で終焉したのだ。

### 恐慌はつづく

第二次世界大戦はポンド凋落・ドル隆盛、社会主義世界体制の前進、発展の時代となった。だが、恐慌は続く。

金・ドル交換停止(1971)、第一次オイル恐慌(1973)・第二次オイル恐慌(1978)、北欧(1987～1991年)・アジア(1997)、ロシア(1998年)の通貨危機、ラテンアメリカ債務危機(1980～1990年代)。

21世紀、経済危機は日本でさらに深まる。株式投機の破綻―信用恐慌(1991)、電機―IT恐慌(2001)で日本はマイナス成長、ゼロ金利の時代に突入した。「デ

フレがいわゆる。デフレとは何か。物価が下がることである。21世紀以降の日本経済はデフレではない。慢性的過剰生産によるダラダラした恐慌だ。貨幣資本はありあまっている。借り手（投資先）がない、だから利子は下がる。利子率には利潤率のような法則はない。19世紀から20世紀の、だかららした慢性的恐慌の経済状況にある、もつと大きな規模でがリーマンそしてコロナだ。

### コロナ恐慌 長くつづく

「コロナ」恐慌がどのような姿をとるか。リーマン恐慌は金融業、不動産業倒産から始まった、金融（金の流れ）は資本主義の動脈、FRBは金融資本の国営化等7000億ドルを銀行、大資本に流し込み波及をおさえた。「コロナ」はすでに3兆ドルを超えた。リーマンより規模が大きい。危機は常に搾取、収奪される弱い者に襲いかかる。「コロナ」はその傾向をさらに強くする。すべての勤労諸階層にというように。

「コロナ」恐慌は長く続く。第一に感染症であること、第二にワクチン完成までに長時間といわれていること、第三に世界そして中国の経済状況がリーマン時と大きく違うことである。リーマン時、世界市場は拡大まっさかりであり、今、中国は経済の爆発的成長が終焉し、リーマン時ように、世界経済の救世主にはならない。（伊勢 太郎）

## 中東情勢とアメリカ

### ーアフガニスタンを中心にー

中東・北アフリカには22の国がある。シリア、スーダン、リビア、ヨルダン、レバノン、イエメン、アフガニスタンは内戦下にある。トルコ、アラブ首長国連邦（UAE）、サウジアラビア、クウェートは内戦の国々に武器、干渉軍を送る。イスラエルはパレスチナを侵略する。イランとサウジは中東の経済・政治の主導権をめぐり抗争する。イラクはその中で翻弄（ほんろう）される。

中東諸国が軍事国家であることを示すのが兵器の輸入だ。サウジ、エジプト、UAE、イラク、アルジェリアが上位輸入10ヶ国の5つを占める。輸入で武器を調達できるのは干渉国、内戦・戦時下にある国は丸ごと同盟国にたよる。その背後でこれら諸国に干渉するのが新旧の帝国主義アメリカ、イスラエルとロシアである。アメリカが生産する富（GDP）20・5兆ドルの13・6兆ドルと63・4%に接近した中国は海と陸のシルクロードで中米、アフリカで体力づくりを専念する。アメリカは中国の体力を消耗させようと経済・政治・心理戦争で攻撃する。

中国は最初の新型コロナウイルスの攻撃を受けた。独力で収束の道を探し出した。中国と「敵対」しながら、社会主義の政治・経済的伝統を残す国は、中国の教訓を自己に生かした。南北戦争で国づくりをおこなった半島の国も。中国をバカにしたアメリカ、ブラジルは逆である。これでトランプが再選されることがあれば、日本の国民も利口でないが、アメリカの国民はそれ以上にバカといわれる、「正当性」をもつ。話がそれた。中東に移す。

イラン革命（1980）、「イラ・イラ」戦争（1980）、イラク侵略（2003）、アフガン侵略（2001）、最近ではアラブの反独裁革命（2014年）である。中東の国々の状況を典型的に示すのがアフガニスタンである。アフガニスタンはアメリカの侵略戦争から戦争は19年にもなる。なぜ長引いているのか。帝国主義諸国、アメリカの干渉・介入である。

東京新聞（3月25日付）は元アフガン駐米大使（2005年～2007年）の談話をのせた。元大使はアフガン進駐が長引いているのは①パキスタンがタリバンに隠れ家を与えた、②カルザイ大統領（アメリカのからい政権）が部族・軍閥を統制できなかった、③誤情報で正しい政策がたてられなかった、ことが原因と分析してみせる。こんな分析ならだれだってできる。同日、ワシントン発の時事電にこうあった。

「ポンペオ米国防務長官は23日、アフガニスタンのガニ大統領とアブドラ前行政長官が政争に拘泥していると批判し、アフガニスタンに対する財政支援のうち10億ドル（約1100億円）を削減すると表明した。ポンペオ氏は同日、首都カブールを予告なく訪問、ガニ、アブドル両氏と会談した。」

減らされた10億ドルは、アフガンにはどんな額になるか。アフガンのGDPは208億ドル、予算は3994億アフガニ（1ドル＝77アフガニが為替レート）であるから50億ドルとなる。予算の50%超は米国にたよる。予算に占める国防費は20億6000万ドルであるから、予算の50%、GDPの10%超が軍費となる。とつづく昔に破たんしている国だ。しかし、生き延びている。アメリカの支援によってである。

アメリカから流れこむさまざまな金は、政府権力者、その寄生者、さらにはアメリカへと、腐敗をもたらす。アフガン国民は「アメリカは出ていけ」とタリバンを支援する。アメリカはなぜアフガンにこだわるのか。アジアと中米を結ぶ要衝であるから。アフガンには過去、イギリス、ソ連が進駐した、しかし追い出された。次に、追い出され、アメリカ支配の終わりを迎えるのもアフガンの地となる。戦争がつづく。シリアも状況は同じである。

（水野 仁）

## ◇読者からのおたより◇

兼子千栄子さんの短歌から 『週刊新社会』2020年7月7日（火曜日）付8面、鎌田慧氏の

『沈思実行』（13）を読み、なかの一文に「トランペット」とありました。浮かんだ一首――

\* 切れぬ仲 トランペットは 三代目 尾を振る姿 忠犬晋三

「トランペット」 トランプ大統領のペット＝安倍晋三の意味合い。いいえて妙と感心しきり。

思い出の郵便ポスト 今回の思い出の郵便ポストNo.169（2020・7・1）は、新潟県魚沼市千田郵便局前の丸型郵便ポストです。昨早秋に撮影しました。

梅雨に入り、コロナとあわせてなかなかすっきりしない毎日です。りんごの作業は毎日摘果作業の日々です。「ずく」（＝長野県で「精を出す」と根気のある仕事です。小雨の時等、みはからつて、水田作業ですが、雨がずっと果物は甘くならない、これがまた心配の種です。

コロナの影響で失業、閉鎖、倒産。一方、1億5000万円もの金を使って汚い選挙。マスコミのネタは際限ないですが、庶民の生活苦は深刻です。

（長野県飯綱町、山浦隆芳）